



ペテロ行

2017年11月1日発行
(毎月1回1日発行)

カトリック谷山教会

891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738

E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: <http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/>

発行人: 頭島 光 神父 編集委員: 太田勇二郎 Sr.下川千穂子 岸誠之助

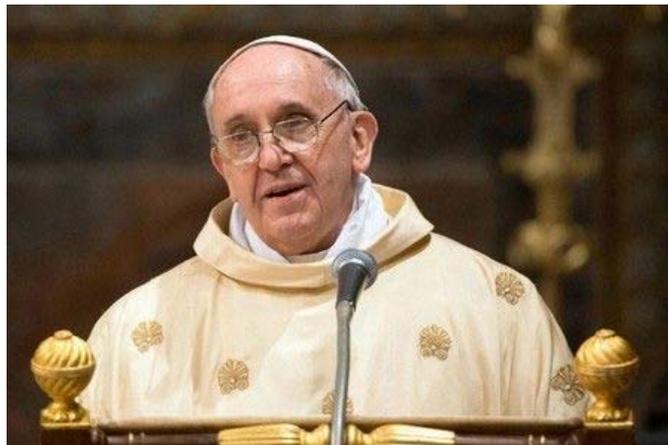
人間のいのちとその営み

◆11月は死者の月ですが、一体誰が死者のことを思い、その命の尊厳について、また人間の美しき営みについて、黙想するでしょうか。いまや世界の技術的な進歩は、近年ますます、目を見張るほどの進歩をみせつけています。僅か200年足らずで、世界はすざましいデジタル革命によって人工知能AIを持つロボットを生み出し、ついに人間は自分たちの生活にあらゆる可能性を提供するテクノロジーを作り上げてしまいました。今やデジタル機器は神に代わって新しい創造の驚異を見せています。しかし、その一方で、私たちの共に住むこの世界の状況は、ますます深刻なまでに痛みつけられており、その穴の開いた傷口を誰も振り返ろうとさえしないのです。

◆人類の発展がより良い方向に方向付けられているのならば、今後も人間の生活の質は、ますます向上することでしょう。しかし、一旦そのネジを巻き違えてしまえば、どうなるか。世界は瞬く間に天国から地獄へと転落してしまうことでしょうか。果たして、正しい着地点を世界は見出すことができるのでしょうか。確かに、私たち人類は世界をも支配する強大な権力と権威とを手に入れました。しかしその一方で、ナチズム、全体主義、共産主義、独裁主義は繰り返し歴史に登場し、何百万もの人を殺戮、文化遺産を破壊してきました。そして、今や世界の経済力と科学力は、人間の生活の安定と安全、また価値あるものと有用性とを旗印にして進歩という名のもとに発展を下支えして、

今日を築いてきました。しかし、果たして現代世界は平和だと言えるのでしょうか。

◆言うまでもなく、科学主義や経済優先の社会は私たちに生活上の裕福感と利便性を与えてきました。しかし、人間が本来持ち合わせている責任感や物事の是非を正しく捉える能力、そして良心の成長には全く関心を示してこなかったのです。人間のいのちとその営みには限界があることを、なぜ認識しなかったのでしょうか。今、眼前に迫る脅威に、どうして問題を把握し得なかったのでしょうか。今こそ、私たちは増幅し続けるこれらの権力や悪意ある権威を前にして、無防備になすすべもなく滅ぼされることがないように、目を覚ましておくべきです。



◆今や、人類は世界を支配することのみ躍起になることを止め、地球規模の飢餓と貧困を見つめ直し、富のより良い分配と未来への責任ある配慮に着目すべきです。破壊は、死のみを産み出し、命を

奪い取るだけの人間のエゴに過ぎません。しかし、愛は死に打ち勝つ新しいいのちの姿であり、この愛の営みこそが、人間の本来のあるべき姿を創造していくのです。悪意ある死は完全に滅び去り、神の支配による新しい命の誕生を予感させるものこそが、真の未来を築き上げていくことができるのです。

今月の聖人から 4人の殉教者

11月8日

ローマのチェリオ丘にサンティ・クアトロ・イン・コ罗纳ティという教会が建っていて、その中に大理石彫刻家の組合に捧げられた小聖堂がある。教会は6世紀またはその前からここに建てられていて、それは4人ではなく5人の殉教者を記念している。彼らはパンノニアから来た優れた石像彫刻家であった。名前はシンプロニアス、クラウディウス、ニコストラトス、カストリウス、シンプリチウスであった。

彼らがスミルニウムに住んでいた時、ディオクレチアヌス皇帝のためにギリシャの薬の神エスキュラピウスの像を掘るようにと命令された。この仕事は名声と共に多額の報酬の源になったであろうが、5人の彫刻家はキリスト信者であったので、偶像崇拜に協力することは出来ないと断って拒絶した。



それから、彼らは太陽の神に供え物を捧げるように命じられたが、これも断ったため、彼らは縛られて鉛の箱に結び付けられ、川の中に投げ込まれて殉教した。

Taniyama CC NEWS

10月1日

信徒会館ホールの改修工事（聖堂内等の暖冷房設備を含めて）が終了してその感謝と祝別が行われました。駐車場への出入りや、隣接のトイレも美しくなって非常に使い良くなりました。



10月8日

聖アルフォンソ合唱団の本年度第2回目のミサ曲奉獻は大分のカテドラル(カトリック大分教会)で行われました。司式は井下神父様で年間第27主日のミサの中(なか)での奉獻でした。祭壇内陣の張り出しで合唱団の席が分かれたりしましたが、神父様や信者の皆様のご協力で、合唱団やオーケストラの配置は、現状での最善の形になり、練習の成果を十分に発揮出来ました。

大分教会の信者さんがとても良く、事前のお勧めや勧誘をして下さいましたので、

当日は満員の盛況で溢れんばかりの人で埋まりました。大成功でした。(今年の最終回第3回は12月24日のクリスマスイヴです)





ムイベルガ神父のアンテナ

クリスマス・オラトリオ

12月の10日に初めて当教会で、ヨハネス・セヴァスチャン・バッハのクリスマスオラトリオが演奏されます。このオラトリオは六つのカンタータに組み立てられています。オラトリオは長いので、当教会では第1部は12月10日に、第2部は17日に演奏されます。テキストはイエズスの降誕からベトレヘムに現れる3人の学者の話までの途切れのない物語です。作られた音楽作品はとても良いものになったので、このオラトリオは昔と違って、2回に分けて演奏されています。プロテスタント教会は第1部を説教の前に歌わせました。なぜなら、歌や、音楽や、説教が聖書の言葉の和声の、バッハによると霊的な音楽は信仰の証、または福音の知らせにならなければならないからです。この目的を達するために、バッハは敬虔に実行された考察方法：朗読＝考察＝祈り、この組立は全体のクリスマスオラトリオの特徴になっています。

具体的な例えを取り上げましょう。第1部には朗読に次のレチタティーヴォが歌われます。“その頃、皇帝アウグストから全国の住民に登録するようにとの勅令が出ました。「つながっている」私の大好きな花婿”1のレチタティーヴォは考察のようなものです。“シオン、用意しなさい”というアリアは祈りの態度に合っています。アリアが終わってからコーラスはあなたをお迎えしたらよいでしょうか、と歌っています。バッハはこのコーラールを使って祈りの雰囲気強めています。引用されたテキストは直接聴衆向けです。これと同じように音楽もだんだんと聞く人の心に浸みこんでいって人間を変化させていきます。第1部の最後のコーラールは今まで聞かせた内容をまとめて人々の祈りとつながっています。

ヨハン・セヴァスチャン・バッハのオラトリオは素晴らしい、難しい、芸術作品です。音楽はオラトリオの一面にすぎません。もう一つの見方は次の質問です。「このオラトリオは私たちにとって意味のあるものですか。」一番最初に聞く言葉が聞き耳を立たせます。”Jauchzet, frohlocket”（歓声をあげる、歓呼する）。しかし jauchzen の本来の意味は絶叫する声を使って自分の喜びをみんなに知らせることです。その面でバッハの住んでいた社会の内からJauchzet, frohlocketのための外的な理由があったのでしょうか。いいえ、と答えなければなりません。バッハはクリスマスオラトリオを1734年に初演しましたが、その時のドイツ皇帝のフランスに

対する宣戦布告はきっと喜びの叫び声ではなかったでしょうか。信仰の強いバッハにとって、イエスの降誕は理由になったと考えられます。第1部の第2のコーラールはヒントになります。“いと高きお方の子が地上に生まれた、なぜなら地上の者の幸福に非常に興味が深いので”人間にとって救いになる神の愛は人間には最高の価値なのです。これを知ることは確信を、又は明るい楽観的な気持ちを与えます。クリスマスオラトリオによって皆の心がこの気持ちで満たされるように、祈っています。



*Joh. Seb. Bach.
Direktor Ampt*

維持費袋

**「私たちの教会は
私たちの手で」**

教会維持費を負担することは
私たち信者の義務です。
各々の分に応じて捧げましょう。

教会維持費

各自が分に応じて毎月一定金額を教会運営・管理と宣教司牧などの経費のために捧げる献金です。初物を捧げる心で月々献金しましょう。

施設費

聖堂や信徒会館等の建物の修理、設備の拡充、備品の購入などのための献金です。

神学生養成費

司祭を目指す神学生の育成のための献金で全額教会へ送金されます。